

昭和二十四年七月二十三日

第三種郵便物認可
発行（毎月一回・十五日発行）

（通第四三六号）

親鸞聖人の信仰 近角常観 (1)
父母因縁 |

慈光のあと 福島政雄 (6)
内から外から 井上善右エ門 (12)

慈光日誌抄 西元宗助 (15)

自力から他力へ 村上速水 (17)

木村無相師の法信(一) 岩崎成章 (19)

歎異抄に導かれて(四) 花田正夫 (21)

慈光

第三十七卷 第十一号

次
目

親鸞聖人の信仰

—父母因縁—

般舟三昧も父となし大悲母となす
般舟三昧父
大悲花生母

後者般舟三昧母となす
後者般舟三昧母となす

近角常観

アミダホヒゲナリ
一仏の名号は仏の方から来るところの恵である。南無阿彌陀仏といふは、仏の方から汝の親であるぞと自ら名乗りて我々を呼びたまう声である。その名号を聖人は慈父と名けられた。名号を慈父とまで喩えられたは聖人が一と通りで仰せられたに非ず、それには大に味のあることである。

先ず私の経験に就て案じますに、自分がこの人生上に苦しんで終に何處にも安ぜられず、世の中に自分に対しても同情してくれるもの、真に恵あるものは無きかと求めても得られざる時の有様は人の友を求め、孤児の親を求めて得られざる有様である。そこへ、仏は悪しきものを恵む親なり、我等の父なりと光がさして来て、ここに南無阿彌陀仏の父に遇ったのである。そこで徳号の慈父と云われた。ただ漫然と父なりと喩えたのではない。実験の味である、その具合は如何と云うに、心中が一つ開け、心中親に遭遇した心地を慈父というたのである。

又一方に、光明の母といふことも、つまり一念同時であ

るから父母前後は無けれども、成程仏こそ我を恵む親と分つたとき、「云うべからざる喜である。即ち仏は慈悲の塊と分つたとき、其の仏とは即ち南無阿彌陀仏である、慈悲の塊とは光明の慈母の実験である。六字は仏の勅命の聞えた味とでも云おうか、光明の母とは懷かしき温かな光明の懷に攝められた味である。「金剛堅固の信心は、仏の相続より起る」で、常に相続して照して下さる光明が、我心の底に届いて、名号の意義をああ有り難いという心が起りて来たという光明名号の因縁の味は信仰の一念の開發する当時の有様を味うにあらずんば知り得られない。

この光明名号因縁のことはその本は既に竜樹菩薩の上に書いて、般舟三昧を父と為し、無生法忍を母と為すとありて、念佛三昧と大悲光明の照して信心があらわれてきて仏の恵みこそ有り難いと直に歡喜の心が起るのは、恰も菩薩の初歡喜地と同じことであつて、求道者が初めて仏の光を微塵ほどみとめたとき、真に喜びの心の開発するところの

光明なり名号なりである。

名号は親の心、仏陀の喚声であると云うてしまえば或は名号は称えずともよいと云うに似たれども、大に然らず。南無阿彌陀仏といふは親それ自身であつて、我等の口に称うるのでないと云うてはならぬ。そう云うてしまえば名号という値打がない。何故に名号を以て親を示したかといふに、親の名を称えさせて親の恵を知らしむべき名前である。もう一つ極端に云い放てば、信心の來らぬ前、親に遇わぬ時から親の名前を呼んで居つたが、いよいよ親に遇つた時、あ、親は有り難いと喜ぶことになるのである。名号は親の名であるが、我々の口にかけずに向うにのみ置いては何時までも我々に来らぬのである。法然上人は称えよくと教えられた。南無阿彌陀仏は我々の称えるものである。然し親を探し求めつゝ称うると、親を見出してあ、父よとすがる思から叫び出たとは大に味が違う。親の恵の知れたとき親の名を称える我々はこれを忘れてはならぬ。

親鸞聖人は行巻関首に、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり大信あり、大行とは則ち無碍光如來の名を称するなり

と云われた。我々の身を離れた大行大信でない。我が口に称うる念佛、我が心に入る大信なりといえばとて、我々がこしらえた行信でない。仏の恵から来つた行信である。

歎異抄には、親鸞におきてはただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。

うよき人の仰は大行である。「信する」は聖人の信仰である。私は初にこの「信」の方に目がついた。聖人は「たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に落ちたりともさら後に悔すべからず」何でもかまわぬと空を信じたのではない、信する所の確なものがあつた。念佛の語を信で受けた。如何にも偉大なる仏の慈悲があり難いと信じたのである。併しながら信ぜにやならぬという力味ならば、手足に力を入れたので信の立場がない。人生もし此念佛無くば何を信ずるぞ、唯この念佛の偉大なるものを信ずるところで安心が出来るのである。然れども若しそれゆえに念佛が大切なりと、念佛に滞るならば誤りである。

然らば如何にすべきかというに、信するも真に信じ、称うるもの真に称うる。この二つの円満に結びついて、無暗と信するのでない、力んで称うるに非ず、師教に従い、仏願に順うて、その通り信ずるのであるから、仏陀本願の勅命と、此方の信心と違わずに、信じた通りに唯念佛するのである。これで一致ということをよく味わねばならぬ。もし

賢者の信を聞いて、愚禿が心を露す。内に賢にして外は愚なり。内は愚にして外は賢なり。

愚禿が心は、賢者の信と云は法然上人の教示で、如來の本願広大の仏の恵である即選択集一部である。愚禿の心は、それを頂いた聖人の心中で三信訖これである。

以上によつて名号の意味は明らかである。信仰に入る前、未だ親に遇わぬ以前に称うる念佛も親の名前を呼ぶのであるが、親に疎い念佛である。かく称える間に親の恵が我が心に届いた時、親に初めて出遇うた嬉しさのあまり、嗚呼父よと叫んだ念佛が真の念佛である。親に初めて出遇うて喜びの叫びを出さんと思い立つ心の起るとき、此時早くすでに光明の懷に攝取せらるる。其處に至る所以は大悲の切

煩惱の衆流きしぬれば

智慧のうしほに一味なり。

なる催しよりして迷を亡し惱を救わんと常に念じ給う光明の母の賜である。聖人の和讃に照らす如きに通じて、尽十方の無碍光は、
豈む無明のやみをてらつゝ、走れ耳す智の間禪呂ノ樹る
時、
一念歎喜するひとを軸目へ、子はこのれ身法である。
必ず滅度にいたらしむ。」樹へしも。又聞そく「
無碍光の利益よりて、深入て智慧をも詰め念じて樹
輪等、威徳広大の信をえて、
周のかならず煩惱の氷とけむる事多す也。即ち聞て云柳
水を飲すなはち菩提の水となる。」
此はなほき私は義の如月
生罪障功德の体となる。

煩惱の衆流きしぬれば
智慧のうしほに一味なり。
これらは光明名号で云うてある。名号の因に温き光が心
にさしそい、無明の黒闇を破つて下さる、これによつて信
心を生ずる。この信心が又光明名号の外縁の相続によつて、
報土の真身を得証する。初め一念の時ばかりの念佛でなく、
一生の間称える念佛である。初一念の時照破の利益を与え
られし光明は一生の間攝取し護念して下さる光明である。
換言すれば、父母は子を養育するのである、始終守られて
報土に入るるのである、此を行卷には嘆詠して次の様に云う
て置かれた。

水と水のごとくにてまつた。我の大悲の胸襟を現行
人の水多きに水おほし。問う水音の外の胸の調子。
「吾は障多きに徳おほし。」ある種の胸の調子も現れるが、
是と云うてある、皆これ光明の方から云うてある、光明が
円融して我等の心に入る。又
名号不思議の海水は、やより裏手をお對ひ音音が正氣相
逆誇の屍骸もとどまらず
衆惡の万川きしぬれば重音が申悲聲語の外觀る所
功徳のうしほに一味なり。是の本體當に言ひ難か無る所
尽十方無碍光の本體である、此即はさむれともいす解せ
大悲大願の海水に

最後に些細の経験を加えて申しますれば、私は最初念佛を称えず、先ず光明の方に気がついた。其時の経験とは仏は慈悲の塊であると書いて置いた。これは念佛を称える味

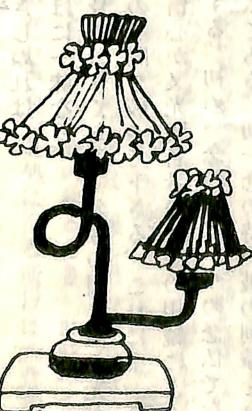
を知らずに、仏の恵をのみ喜んだ。これは寧ろ光明の方である。而るに慈悲は光明である、光明は名号によりて顯われる。

近頃は始終念佛を唱えることが非常に有り難く感じさせて頂きます。私一身上の道行で申せば信じて称うるが有り難いことあります。

昨秋博多の万行寺に詣った。万行寺は彼の有名な七里恒順師の寺である。師は寸暇を疎にせず、來訪の人を一々見して信を勧められた。百人内外の求道者が常に門前に宿してあつたということである。師が或年京都へ上られた時、一人の同行が同じく上京し同じ旅宿に投じ師の隣室に在り。寝に就くにあたつて、何気なしに「弥陀大悲の誓願を深く信せん人はみな、寝てもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏を称ふべし」と和讃にあります。が、ねてもとあるのは只臥して居ることか、寝入つて居ることですか、と問うた時、師答えて曰く、「さめてもとある対だから寝入つて居ることであると、此人また問う、寝入つて居ながら能く念佛し得べきや。師曰く、然り能く念佛し得べしと。又問うて曰く、如何にして為し得べきか。師曰く、それには秘伝がある、望みなら教えてもよいが、併し汝は寝て居ぬ間称名し得るか、これを為し得たらんには寝ても称名することを教えた。此人慚愧して云うところも無かつた。夜半に眠り醒めし時、師の念佛の声絶ゆることなし。怪しんでこれを窺う

に師熟睡の中にあり、而も念佛して曉に達して止まざりしという。この人これを我に語つて曰く、此事心肝に徹し今なお忘る、能わず、實に尊きことなりと。右の和讃は七里師の晩年に至つて、いつも諷誦して人に話されたもので、師の信仰を最もよく述べたものであろう。

これと同時に播州の後藤祐護師は明治十九年頃から日課念佛三万を勧められた。其後宗教問題の為に非常に奔走せられた為に、日課念佛の数を満たすことが出来なかつたで、事治つて後これを補われた。師は非常に罪悪感が強くして常に「極惡深重の衆生は、他の方便さらになし、偏に弥陀を称してぞ、淨土に生ると述べたまふこと辱なし」と独語しつゝ念佛せられた。この和讃はまた後藤師の信念をよくあらわしたものであろう。この二種の讃文は、一つは機、一は法、相対して両師の面目を發揮して居るといふべきである。



慈悲の聲と光

福島政雄

ヤシ

それは私の二十六歳の夏六月であつた。東海道線の下り列車の窓に身をおいた私は美しい富士の姿に眺め入つて居た。残雪をいただいた富士はその日はじめて私に澄みわたつた美しい姿を見せた。富士の峯がそれほどに美しいものであるとは私はその時初めて知つた。しみじみとその頂上があたりを打仰いだ。

併しその美しい景色を眺める私の胸には眞実の慰めはなかつた。私は悩みの雲に塞ざされていた。青春期の末期を吹き荒れた胸の嵐は私の心中に重苦しい灰色の雲を吹きあつめて居た。人生は既に淋しみの極みであった。青春期の始めから中頃にかけて人を罵り世を憤つた私は、その氣力さえ失つてしまつて居た。而してわが理想は高くわが胸は清いと自ら許して居た過去数年の自己を振返つてはただ涙を催すばかりであつた。

おもえば私の過去の理想は美しかつた。あの富士の峯の

美しきが如くあつた。わが将来を教育という世界に望見して居た私は、そこにさまざまの美しいものを描いて居た。愛ということは私の旗幟として高く掲げていた。幼少の頃から厳格な儒教的の家庭に育ち、中学時代を鍛錬主義の学校に生い立つた私には、その愛といふことも恋愛のようなものではない積りであった。高等学校から大学の学生時代にかけて、或はキリストの山上の垂訓に泣き、或は梁川の美しい悩みの文に酔い、或時はトルストイの晩年の思想に惚れ、又は楞牛に導かれて日蓮上人の精神に感じ、かくして大学を卒業しようとする頃の私ははじめてペスタロッチーの世界をうかがいたいという考をほのかに起すと共に、和訳法華經を三度も繰りかえしてそこに大なる信念をつかみ得たと思つたのであつた。

忘れもせぬ明治四十五年七月十日銀杏の緑の葉かけ美しい大學正門内の並樹の下に、嬉しき胸も躍るばかりに行幸を迎へ奉り、その後図書館に設けられた卒業式場にわれこ

そは確固たる信念を抱んで最も意義ある卒業をする身であると思ひあがつて居たのは昨日のことのようであるのに。何事ぞ、その後僅かに一年あまりの間の我が心の動転は、教育の楽しさは去り心の淋しさは湧き起り、世の人は冷たぐ、我れ一人温かなる心を以て教育の野に立つても、これを理解する人もなく、教え子は、われ笛吹けども躍らず、我はただ一人淋しき胸を懷いて教育の道を孤行する人となつたのであつた。

人の世の深き淋しさを味い始めて既に十ヶ月、灰色の雲は私の頭をも胸をも覆いつくした。「灰色の気分」という新しき人々の使う言葉は私の心持をあらわすに最もふさわしかつた。私の心は次第に氣違ひじみてきた。夜もよくねむることが出来なかつた。法華経によつて何か確固たる信念を抱んだと思つて居たことは実は夢のようなものであつた。それは此の孤独の苦しみと淋しみとの中においては、私にとつて何の力にもならなかつた。私はただ慰めを人に求めた。併し人はもはや私の慰めにはならなかつた。教え子が懐しそうに「先生！」と呼んで近づくのを見ると、私はかえつてすまぬという感が起つた。

三ヶ月程前から私は近角常觀先生のお話を聞いて居た。はじめてお話を聞いたのは大正三年三月の末の日曜日であった。お話の題目は「世間虚偽、唯仏是真」であつた。そ

の三時間あまりのお話を私は胸に針をさされるよつた感じで聞いて居た。過去一年間の私の心の生活が顧みられた。私は自分は温い心を持つて居ると考えて居たことが虚偽であつたと気がついた。世間の虚偽なのは我が心の根本が虚偽であるが爲であつた。私は世間虚偽ということをしみじみとしみじみと感じた。「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとわごと、まことあることなし」私はいつしか自己の魂に哭く身となつた。こうして既に三ヶ月、灰色の雲につゝまれた魂を抱いて居た私は、今東海道の汽車の窓に美しい富士の峯を仰いだのであつた。而して人に慰めを得なかつた私は自然にも慰めを得られなかつた。嘗てワーヴワースの自然を歌つた美しい詩に醉つて自然を讃美した私の心も今は全く変り果て居た。自然も亦無常流転のものである。この美しい富士もいつしか変り行く、それを思えば私にはすべてが夢幻であつた。夢幻の宇宙、人生を悲しむ私をのせて汽車は西へ西へと走つた。

二

郷里熊本で私は徵兵検査を受けた結果第二乙で補充兵に編入され、東京へ出発しようとした時、私はあらためて両親の前に呼び出された。両親が私にもち出したのは結婚問題であつた。そのことで私がどんな考を持って居るかを尋

ねられた。併しそれに私は素直に胸中を打ち明けることが出来なかつた。気違ひじみて居た私の胸中にはむら／＼と両親に対する反感が起つた。この私の若い思いが両親に分るものかと思つた。それでとりとめた答もせずに、そのまま東京へと旅立つたのであつた。

東京にかえつてからの懊惱は更に続いた。それを打明ける友も私にはなかつた。灰色の雲は更に濃くなつた。灰色の曠野の中をとぼ／＼と歩んで行く自己の姿は此上もなく淋しいものであつた。それでも私はまだ絶対絶命になつてゐるとは考えなかつた。近角先生の懺悔録を読んで、師が煩悶の当時に一室の中をキリ／＼と足つま立てて廻つて居られたことを知り、自分は煩悶はして居てもまだそれ程度ではないと考えて居た。私はまだ生ぬるかつた。生ぬるい煮えきらぬ心は果てしもなく続くよつであつた。私は悩み乍らも姑息偷安の一 日々々を送つた。胸中に氷塊のような苦しみが五つも六つもつかえて居るのに、まだ奈落の底におち込んで居ない積りであつた。暑苦しい六月の末は私の気分をなお更に重苦しくした。

三

七月五日から求道学舎の夏季求道会が始つた。私は隙を見出しては数回聞きに行つた。題は「人生問題と信仰」で、講本は教行信証の信卷の阿闍世王入信文であつた。そのお

話を聞い行くうちに私の胸の中に不思議な変化が起つた。苦しみの塊のような氷塊が五つも六つもあつたとおもつた私の胸の中がいつしか次第々々に軽くなつた。お話はしみじみと私の苦しみの胸にひびいた。阿闍世王の煩悶と求道者がよそごとならず私の心にひびいた。

七月十一日に、夕方一人の友を新橋駅に見送つて日暮れになつて私の下宿に帰つた。私の下宿はその頃代々木の十三間道路のほとりにあつた。私は代々木の停車場で電車を下りて、美しい星空の下を歩んで、今の明治神宮の後の方、その頃の代々木の御料地の北に沿うた道路を西に向つて歩いて行つた。その時である。私は私の心持が根本から転換したということを感じはじめた。

すべての苦しみの氷塊は私の胸の中から融け去つて居た。しみ／＼と深い心持が私の胸にみなぎるよつであつた。私はこの身このままに大なる仏の御懐に抱かれて温かに護られゆるやかに揺られて我が魂は久遠の国に行き通うよつであつた。空を仰げば星は美しかつた。その星の空をそのままに私の御国は私をつつむよつであつた。私は西に向つて静かに歩んで行つた。しみ／＼とした嬉しさは私の魂の奥の奥へ徹した。

至るまで一度も念仏したことがない、むしろ軽蔑して居た私が、念仏せずに居られなかつたということは、不思議の中の不思議であつた。私は合掌念仏しながらしみじみとうれしい心にひたつた。

かえりみれば私が親鸞聖人の世界にふれ始めたのは昨日のことではなかつた。もとより儒教的家庭に育ち、仏教の縁がとばしかつた私は、高等学校時代までは日蓮上人の名を知つても親鸞聖人の名は知らなかつた。私が大学時代に親友の父君の一周年忌の法筵に招かれた時、友が多田鼎師の一「恩寵の宗教」という小冊子をあたえた。それを私は幾度も繰りかえして味つてから親鸞聖人がしんみりと親しまれるようになつた。ことにその中の「理想の聖者」の章が私の聖人への親しみを深くならしめた。聖人が一切の衆生と仰せられるその御心持が私にはしみじみと嬉しかつた。努めよ励めよ勇氣を出せと私を鞭うつ古の聖者ももとより有りがたい。併し自己が唯一筋に殊勝であると思つていた夢がさめて、自己をどこまでも裏切るもの自分の中に発見してからの私は、鞭打つ聖者よりも共に苦しみ涙する深き心の人がなつかしくなつた。聖人こそは正しくその人であるという感じが私の心を深く動かして居た。

しかしその感激は一高一低の波動があつた。直接に多田

師に疑問を持つて行つて、信仰とは仰信ともい、仰いで信すこの時を境目として仏陀の大心光に護られて此の世の旅行く身となつた。

振り返れば、教育の野において寂寥孤行の自己の姿を発見した私こそは正しく善導大師の二河の河畔に立つ身であった。荒涼たる河畔に私は唯一人立つて居た。私の魂は絶対絶命であつた。南に燃ゆる火の河は私の魂から出でて燃ゆるものであり、北に湧き立つ水の河も私の魂から出で、いるものであつた。それは私が教育界を憤慨する瞋恚の炎であり、私が教え子に利己中心の要求をする貪愛の波であつた。しかも自己一人を自ら孤行の世界に置き、友に離れ父

母に背いて、而も自ら自己の淋しみに泣いて居たものである。四顧寂莫頼るべき人もなく、心を打あける友もなかつた。此の時私の魂の底にひびいて来た御声こそは近角師をとおして響いた釈尊の發遣の御声であり、弥陀の久遠の招喚の御声であつた。それは沈み行く私の魂の底にしみとおつて、私が如何に暗黒なる自己の姿に哭いて居ようとも、否その暗黒が深ければ深いほど、痛切であればある程、層一層我れを悲愍し給うて、わが魂の底にしみ通り来つて我れに生命を廻向し、我れをして久遠の道によみがえらした。

信卷

此の時私は正しく阿闍世の歩んだ道を辿つて居た。「阿闍

世とは普く一切の五逆を造る者に及ぶなり。又為とは一切有為の衆生なり」の涅槃經のお言葉は私を指させられたのであつた。私こそは父母を忘る、ばかりでなく、父母の胸に三毒の矢を射かけて父母の身から血を流して居りながら自らそれを知らず、煩惱の暗から暗へ迷いこんで居たのである。然るにその私に「為阿闍世、不入涅槃」の久遠の御声はひびいた。有為相対の私のいのちを貫く久遠の御光は照徹したまゝだ。「阿闍世とは即ち是れ煩惱等を具足せるものなり」この煩惱の暗の深きに徹せずば止まずとのやるせなき本願を廻向したまゝ久遠の仏光、まことにその光の前にこそ私はその煩惱の自己の姿をまざ／＼と見せしめらるようになつた。

することである、自己の胸の詮議をすることではないという御さとしを受けたこともあつた。併し私の心はなか／＼徹底しなかつた。一方には日蓮主義とい、法華經とい、又キリスト教にもなお心の傾動を持つて居たのであつた。

その私が二十六歳の夏七月十一日に唯一の絶対他力の信仰の世界に徹せしめられたのである。それは不思議というより外はない魂の上の事実であつた。今まで魂に哭いて居た私が涙の中にほゝえむ身となつた。

翌くる十二日に近角師の御導きで浅草本願寺で坂東本の教行信証を挙げた。その後しばらくはいうにいわれぬ法悦状態が続いた。この法悦の底には唯一無二の信があつた。

四

子の時を境目として仏陀の大心光に護られて此の世の旅

然るに私の青春の嵐はその恩寵の感を一朝にして吹き去つて了つた。私は父母に対しても何となしに和がぬ感じを持つようになつた。誠に青年期は私にとつては背恩の第一歩の時期であつた。恋心はくせものであつた。それは美しそうに見えて実は忘恩の児たらしめる第一の動機となつた。相対的な五分々の心は父母に対しても動いた。私は自己中心の感情から父母が私を理解してくれぬと淋しがつた。否父母は青春の私を理解してはくれないものと一人ぎめし相手で、私の勝手な淋しみにひたつて居たのであつた。

此の時私は正しく阿闍世の歩んだ道を辿つて居た。「阿闍

青春の嵐の吹き来り吹き去ったあと、おもえはただり難き仏縁にあいまいらせた歓喜の涙のせまるのであった。五心の嵐はそのままに止んだのではなかつた。その七月のしみじみとした法悦の一週間、それから続いたなごやかな四十余日、それが過ぎる頃から私の心は次第に内面の世界に向うようになつた。

今までは外に向つて戦う心ばかりが動いたがそれからは内面の戦になつた。ひとしきりなごんが心持が過ぎ去ると共に、秋風と共に秋の月の光が私の心にしみこんで来たことは、罪と煩惱との問題であつた。青春のまぼろしはまた次々に私の前に浮んだ。それにつれてなお父母に背こうとする自己の姿がはつきりと見えた。暗い波が次から次へと押寄せて來た。それがいつも光の前に融かされて行つた。暗い波の力が次第に大きくなつた。私の心は光と暗い波との間に動搖した。苦しみ苦しんでほつと我にかかる時、私はいつも大悲の光の中に立つて居た。

併し煩惱はどこまでも私について來た。結婚問題もそのままになつて居た。それについて苦しむことが多かつた。たゞ併し今は私の心持を父母に打明けないという態度ではなくなつた。苦しいにつけても、煩惱が狂うにつけても、みな父母に打明けるようになつた。そして父母の心を痛めることがなおさらになつた。

その内心煩悶の波瀾の秋に私は大病にかゝつた。急性盲腸炎で腹部切開手術を受け、二週間病院のベッドに仰臥したままであつた。四週間入院していたが、その病床で少し気分がよくなつた頃から私は様々の御聖教類を次々に読んでいた。むつかしい言葉はわからなかつたが、併し何となくしみじみと魂にしみ込んで来るものを感じた。清沢師のものなども読んだ。それは「信仰及修養」という卷であつた。師の強い信念が私の心にひびいた。そして身と心と次第に快くなつてすつきりとした心持で退院した。私は故郷の父母へ手紙をしたゝめ、今までどれほど親の心に矢を射かけたかといふことを詫びた。そしてくだかれで行く心の平和を味つた。青春の嵐の吹きすぎんだ間、様々な人々が仏のよう見えたり鬼のよう見えたりした。それは皆私の心の姿にすぎなかつた。「世間虚偽唯仏は眞」私は私の心を中心とする人の世がすべて「煩惱具足の凡夫火宅無常の世界」であり「よろづのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきにただ念佛のみぞまことにておはします」の味がそこにあると知つた。そしてこの歎異抄の御言葉の意味をしみじみと我が身の上に味うようになった。

その年の暮、私の二十六歳をおくる除夜の鐘が中野の里にひびいた。親しい友とつどうた私の心にはしめやかなよろこびが湧き出た。

内から外から

井上 善右エ門

聞法の関心と念佛の信とは、内から催し外から与えられる二つの大きな縁によつて、開かれ恵まれるという外はないと思われます。では内に催すとは如何なることであろうか。また外に与えられるとはどういう事柄を指すのでしょうか。先ず仏陀世尊の教えが今現に在る国に生れるということは実に大きい縁であります。そしてその教えに親しく接する身となることは得難き出来事であります。即ちそれは外からこの私に与えられて来る大いなる恵みの始まりであります。ところがこうした縁をうる人とえない人がある。それはどういうわけなのか解りませんが現実の事実という外はありません。それは内の催しと深く秘かな関係があると思いますが、その事情も人間には解りません。たゞ不思議であります。

ということは、實に聞法上、決定的といつてもよい大きな

力の縁となるものです。それはよき人が身を以て法の真実をこの私に投げ与えて下さるからといってよいでしよう。眞実の人格にあう人は誰しも感じることですが、理屈を超えて頭が下るのです。それは眞実そのものがこの私に対して至大的力をもつからに外なりません。眞実に対する敬いの思い、尊さの感情、これが欠如してしまえば人間と法との関係は成り立つ由なきものになつてしまします。しかしこのつながりを持たずにおられないように、もとく關係づけられているのが人間であります。

ある人が戦災にあつて、やつとの思いで避難し、我家が紅蓮の焰の中で燃えてゆくのを見見したとき、地上的なものが如何にはかないかを実感したとの事ですが、この実感に全く無関心な人がありましようか。ところがはかなきを感じるという事は、不壊なる眞実に無意識に照らされてこそはかないか感じるのです。眞実との関係の成り立たない動物にははかなさの感情はありません。

なぜこうまであくせくしているのかと自分で自分を怪訝

に思うのも、やはりそのあくせくが無意味なものとして照

し出されるからでしょう。自己の醜い汚れた心がひそかに

恥しく感じられるのも、それを超えたものに映されて恥し

く感じるのであります。無常を感じるもの同じこと、

自己の頼りなさおぼつかなさを覚えるのもまた同様です。

これは人間が人間であるかぎりごまかすことの出来ない事

実です。そつした内感に催されて道を求めずにおられない

心がおのずときざします。そのきざす願いに応じてよき人

が生きた真実を開示し、その真実への道へと導き教えたま

うところに、聞法は最早やその人の生きる道から離すこと

のできないものになるのであります。

気づかないときから、内に私を照している大いなる働き、

そこに早や阿弥陀仏と私との深い関係が始まっています。

迷つてゐる執我の心中に浸透して先ずこれを照し出す働き

が起る。これが攝取の活動のはじまりです。否、さらに

さらに遠く深くこの働きは活動しつづけていたのであります。

しようけれど、これに気づかず煩惱と業に流されて来たのが

此の私です。久遠の流れの中に倦むことなく止むことなく

育て養いつゝけられて、先ず照し出される身となり、やがて

その真実がこの身を攝め取るものとなつて転するのが宗

教的 세계의 展開であります。この趣きを安心決

木五 23 P.45

定鈔は巧に語り示しています。

知らざる時の命も阿弥陀の御命なりけれども、稚^{おさな}き時は

知らず、少し小慧^{おさな}しく自力になりてわが命と思いたらん

をり、善知識「もとの阿弥陀の命に帰せよ」と教ふるを

聞きて帰命無量寿覺しつれば、わが命無量寿なりと信ずるなり

以上をこの身に顧みると思い当ります。浅ましさを感じて清き真実を慕うのは人間に道徳的理性があるからだと思い主張したときがあります。そう思わざるをえぬときはそつ考えて差支えはないでしよう。しかしそれで自分の最後の落つきと眞の願いが果されるかは問題です。道徳的理性と名づけるものは自己を鞭^{むち}うつ厳しさはもつていて、しかし自己に宿る究極の問題を解決して眞の救いを成就してくれるものではありません。道徳的理性そのものにも執我が附着してゐます。眞面目な人々の間では却つて意見や主義の対立^{対立}が深刻なものになる事実があります。道徳的理性によつて永遠のやわらぎは将来されません。

御一代聞書の一節(二三七条)に、

皆人毎に善き事を言ひもし働きもすることあれば眞俗と

もにそれを我がよきものにはやなりて、その心にて御恩

ということは打忘れて我心本^{もと}になるによりて、冥加に尽

きて世間仏法ともに悪しき心が必ず^{必ず}出来するなり、

偉^{たけ}巻五
一大事なり。あるのは鋭い言葉です。阿弥陀仏の御命の働きを蒙りながらこれに気づかず、小さかしく自力の角^{つの}立てゝさ迷うている身を、阿弥陀仏の御命に帰せしめ気づかしめて下さるのは善知識です。阿弥陀仏は内から喚び育て、善知識は外から教え導いて下さる。この善知識とは、阿弥陀仏の大悲真実を聞き示して下さった釈尊と同じ一つの働きを果して下さるよき人であります。善導大師は、
仰^{あお}て惟^{ゆゑ}るに釈迦は此方に發遣し、弥陀は即ち彼國より来迎す、彼に喚び此に遣わす、豈に去らざるべけんや(玄義分)と言われ、また二河白道の譬喻を設けて二尊の大悲と人生の相を殷勤切実に示しておられます。二尊の大悲とは發遣と招喚でありますが、その働きを今具体的にこの身に蒙つてゐることを思います。我々にとつてよき人、善知識は發遣の働きがいま私に向つて現われている人格と仰がれます。聖人が和讃に「師主知識の恩徳も骨を碎きても謝すべし」と誦されたところにも如実にその御心がにじんでいます。わがよき人が身を以て真実を示して下さることがなければ、卵の殻は破れなかつたかもわかりません。それはまさしく内の催しに応じて外から迫られる真実そのもの、働く力です。そうすると内からと外からの御働きはもとをたゞせば

一つであります。その一つの大いなる攝取力が、内と外との二手に分れて此の身を育て養いはぐくんで下さつたという感銘は動かすことが出来ないのであります。

偉^{たけ}巻三
昭和六年 波岡 茂輝 氏詠藻

おのづから吾が行く道はさだまれりその一筋をゆくべかりけり

念佛の行者を一人朋に得ぬ、この喜びを何にたとへむ笑ふことも語ることもなき一人ゐに訪ひ來し友のただにうれしき

対立をにくむ人ありにくしみは対立なりと知るや知らずや

慈光日誌抄

命一運命

西元宗助

まことに、命なりけり。ことしも裏の小庭に萩の花が咲

きこぼれている。シベリアから釈放されて舞鶴の港に着き、

妻子に迎えられたのは昭和二十四年の秋九月二十四日であつた。そのとき思わず、詠んだのは次の句。

生き死にの境を越えて萩の花

そのときからすでに三十六年になるとは、感無量。あ

と何年、命たまわて、この世に生きさせいただけるのであろう。生もよし死も亦よし、とありたいが、やはり一日

も長く、この世にありたいと願う。なむあみだぶつ

長きて「願わくは、此の功德を以て平等に一切に施し、同

じく菩提心を發して安樂国に往生せん」という尊いお言葉

聖句。これは申すまでもなく善導の觀經疏・玄義分の「帰三

宝偈」の末尾にあるお言葉で、普通廻向文と云われ、私どもが御仏前で勤行するときご聖教の最後に必ず誦するもの

であります。そしてそれは真宗だけではなく浄土宗において

ても同じである。

ところであるとき、六角婦人会での法話会の席上、ひとりお話をさせて、何かご質問はありませんかと申しました。それで私、かねてわが身にいただいておりますまさに、「願わくは此の功德を以て」の「功德」とは、お念佛のこと。そして「同じく菩提心を發して」の「菩提心」とは、もちろん自力の菩提心ではなくて淨土の大菩提心、即ち他力の信心のことであると、こう承り、こういただいておりますとお答えしたことがありました。

そうしましたところ、後日、堪えがたい残暑も漸くすぎまして、という時候挨拶のお言葉に添えて、東京からいつも松葉杖をついて参聴されるY夫人から、御法座まことに有難うございましたと前置きされて、次のような廻向文についてのお味いの文が認めてあって、あつと驚き感嘆したことありました。

慈光(1901年明治35年)豊前・福岡の廻向文等

(円月和上の息)の令息であられて、この淨円寺の養子となつた方。

「今まで、『願わくは』というところを自分の上におき、わたしがお経様を読誦したあと、私の思いを仏様に申し上げる言葉のよう受け取つてきましたが、それは全く逆であつたことに気づかされました」

と。そして、左のように廻向文を、わが身にいただいておられます。左のようになつておりましたよかとの仰せであります。それは、

「願わくは、このお念佛の功德が、十方衆生に平等にくまなくゆきわたり、十方衆生みんなが同じく眞実のご信心をいただいて、どうか我が國—安樂国に生れてくださいよ」との、仏様の切なる願いの呼びかけのお言葉と、昨今いただくことでござります、と。だも出でて、わざわざお詫びをわざわざお詫びをいたしました。

わたしは感動し、かつは慚愧して、この玉文を押しいただいた。まことに廻向文は、如来さまからの、われら凡夫へのご廻向の廻向文であります。

Yさん、まことに有難うございました。

なお、八月の末、福岡県豊前市(ホザン)の淨円寺さまにお参りさせていただいたことを追記する。この淨円寺は、かの仏教済世軍の真田増丸先生(ホザル)が出生の寺。そして現在の住職(真田徳龍師)は増丸先生の師匠であり法友であつた東陽円成師



田舎の映画館で、車の轍を踏んで走り出る。大東湖の湖畔
南丹車の真田車が走り出ます。あたまの車庫へ真
サブハナカタの車庫へ出ます。あたまの車庫へ真

自力から他力へ

村上速水

「私はここでトルストイの小説を思い出す。

ある映画館で満員の観客が、スクリーンに映し出される画面に見とれていた。その時突如、後方で「火事だ！」という叫び声が聞こえた。観客は思わず映写室の方をふりかえると、もう一たる煙が吹き出していた。人々はわれを忘れて唯一つの非常口を目がけて突進した。そして閉ざされた扉を懸命に押した。しかし、なぜか鉄の扉は頑として開かなかつた。あわてた人々がさらに力を合わせて押すけれども、扉は微動だにもしなかつた。煙は一層たちこめ、炎が拡がつてゆく。人々がわれを忘れ、あわてふためいているとき、突然、後ろから「みんな、あわてるな。おちついて一步づつ後ろに下がれ」という威厳に満ちた声がきこえた。みんなのものが、はつと我にかえつて、ことば通りに進んで、その男はつかつくと扉のところへ進んで、その扉を内側に開いた。みんなのものは、無事に館外に逃れることができた。という話である。

悪人、もつとも往生の正因なり。(歎異抄)

それが他力の本願であつた。おもいがけないその出会いが「たまたま」という表現であらわされている。

重ねてここで注意を要することは、真宗の教えを心得ている人は、こつゝう説明をすると、すぐ「内側に開かないのだから」というのではない。扉は外に開かないのだから」とくら押しても無駄なことだ。扉は外に開かないのだから」というのでも、それは結局ダメなことである。人間は他力でなくては救われないのである」という人がいるのではないであろうか。

しかし、そこに問題があると思う。そう云つてゐるその人は、教えを頭の中で知識としてもつていて、少しも自分自身の問題としていないのである。こういう人は、問題を客観的に眺めて処理しているところに問題がある。「真宗は他力廻向の宗教だから、いくらこちらから救いを求めても駄目である。こちらから押すならば自力であつて、真宗ではない」という前提に立つて、ものを処理しようとする。それこそ問題だと思う。知識の問題ではない。その人は知識として教えを理解しているかも知れないが、決して「いづれの行も及びがたき身」などとは思つていないのである。そして救いは先方から自然に与えられると思いつんでいる。他力のすくいをそういう風に理解しているからこそ、他力

親鸞聖人の二十年間の求道は、ちょうど映画館の観客が外に開くものと思って、扉を精一杯押しつけたのに似ているといえないであろうか。内側に開くしかけになつていて扉が、外側に開くはずはない。扉は向こうから、こちらに向かって開く扉であつた。人間の相対的な努力や修行をいくら積み重ねても、絶対者である仏にはなりえない。それに気付かれなかつた聖人は、そこに挫折し絶望した。そのとき法然上人の説かれた言葉は、あの威厳に満ちた男の言葉に似ている。

「いずれの行も及びがなき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

と思い知られた聖人に、扉は向う側からこちらへ向つて開かれた。

「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死を離ることあるべからざるを憐みたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる

を「棚からぼた餅」がおちてくるように誤解されるのである。そしてそれこそ、安易な他人まかせの他力にしてしまつてゐることに気付かねばならない。

話を元へもどすと、たしかに扉は押したから開いたのではない。しかし、押すことによって自分の力では開かない扉であることを、わが身において確認したものののみ、扉は向こう側から開かれるのである。押すことなくして、どうして扉が内側に開くことが確認できよう。押したから開いたのではないが、押すことによつて開かないことがはつきり体認できるものの前に、はじめて扉は開かれるのである。

このことは、他力は自力の延長線上にあるのでないこと教えてゐる。自力から他力へはあきらかに断絶がある。だから「たまたま」なのである。押すことによつて開いたのではないが、押すことによつて開かないことが確認される。「自力無功」の信知のなかに、「他力攝取」の世界が開けたのである。

人間は歎異抄に導かれて(四)

まづさ。人間の親切と仏の慈悲

花田正夫

人間は、眞實の悲愍をして、まことに人間の親切と仏の慈悲

思慕しみ悲れむ心に、現世で、自分の力を本として遂げようとする、聖道門の慈悲という方と、未来で、仏の力を通して遂げようとする、淨土門の慈悲という方との相違がある。

聖道門の慈悲とは、かわゆく思うものを、同情れみ、愛憐しみ、護り育てることである。けれども、思う道通りにたすけおおせることは頗るむつかしい。また淨土門の慈悲というのは、この世にいる間は念佛をもつして、他力によりすがつて、命終れば早く仏となり、仏に具わる大慈大悲の心、所謂、普賢の徳を以て、思う存分に迷っているものを済うことをいうのである。私共がこの世で、いくら可憐しい、可哀そだと思つても、なか／＼たすけおおせられるものではない。あるから、その慈悲は中途半端なもので、未遂げられるものでない。してみれば念佛もうすことばかりが、末の末まで貫き通る大慈大悲の心であろう、と聖人はおおせになりました。(歎異抄第四章池山先生意訳)

そののち、父は死をもつて、私にこの聖人の仰せ仏の御心を伝えて下さつたと、大きくなづいたことでした。

○

近角先生の歎異抄講義の第四章に次の告白がある。

「今より四年前父親の病氣の時に、傍に看病して何とかしてもう一度平復せられるように仕度いものであると、色々心を碎いたが、遂に届かない、人間のことは何事も因縁が尽きればそれ切りである。何と思うて見ても人間の力で助け遂げることは極めて有り得ぬことである。成程人を助けるのを恵むのことは立派な事に相違ない。殊に親の最後に自分の命を捨て、親の命に成らんと思つるのは人間の至情ではあるが、實際は人力の及ばぬことである。この時に唯一の力は仏陀の御慈悲一つである。この時仏の御慈悲なかりせば、天に哭し地に慟するも仕方が無い。唯淨土の一門ありて通入すべし。私の親は平日仏の御恵みを喜んで居られたが、ます／＼南無阿弥陀仏／＼念佛を喜びつゝ、如何にも平穩に念佛の息が絶えて、極樂に往生して下さつた。其様子は恰も障子を開けて中へはいる姿を後から眺める如く思われ、如何にも真実証の極樂世界の有様を此世から眺めさせて頂くことが出来ました。このとき初めて彼土得証の淨土門の味をあじわ、せていただき、同時に直ちに再び穢土の我等を顧みて済度したまゝ此世の親は未來

の親になつて下さつた。どうしても如來の御恵みが無ければ到底たすかることは出来ないと、深く思わせて貰つて、此章の有難い味を、しみじみと知らせていただきました。

聖人の『和讃』に

南無阿弥陀仏の廻向の 恩徳廣大不思議にて
往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり

とあり、また

願土にいたれば速に 無上涅槃を証してぞ

すなはち大悲を起すなり 之を廻向と名づけたり

とあります。還相廻向といふて別に頂くのではないが、広大な仏の恩を頂く念佛の中に、この大利益もこもつてゐるので云々

とお述べ下さつてゐる。この近角先生の次の言葉に、

「私は信仰に入る前に苦しんだのは、如何にもして世のために尽くさねばならぬ、又人には善くせねばならぬ、先方が隔て、も疑つてもこちらから開いて行かねばならぬと、色々と考えて見たが、どうしても届かぬのみならず、後には却て自分の方から右に隔て左に隔てるようになつて、甚だ苦しんだ。この如き者を向うから隔てぬ友はなきか、捨てぬ親は無きかと求めた最後に、初めてかく隔て苦しむ者を隔てず愛し給う絶対の同情者は仏なりと、広大な仏の恵みが向うから届いて下さつた。自分は如何に善くせんとし、

如何に善くならんと計つてもどうしても届かぬ所に、先方から顯われて下さるのが淨土他力の一門である。この門は全く仏の御恵により先方より開け来る門である。この門ばかりが私の通ることの出来た門である、又この門は何人でも行く事の出来る道で易行道と名けられた所以である。相対有限の人生から絶対無限の靈境に引き入れられる門戸は唯この一門である云々」

○ 63・8・9

さて、道綽禪師は、はじめ涅槃の修行しておられたが、どうしても徹底出来ず、すでに亡き雲鸞大師を追慕せられて、玄忠寺に参詣せられた時、その碑文に「愚かな牛をそのまま放置すれば、どこに迷いこむか知れない。そこで槽檻に草を置いてそれをもつて牛を導くほかに救いの道はない」という意味があるのに驚き、大師如き大徳が愚牛にかえられて、念佛の棟をいただいていられるのに、自分のような小字には、淨土念佛の外に通入出来る道はないと、たちどころに念佛門に帰入せられたのである。「末世の道俗各々己が能を思量せよ」と親切に教えられたのである。禪師著の『安樂集』に次の譬喻がある。「一人の老婆が二人の兄弟を連れて歩いていたが、躊躇して橋から落ちて溺れかかった。兄は着のみ着のままスグ飛びこんで母を助けようとしたけれど、母が必死にしがみついたので泳げず、

けであった」とあった。

両氏のことばは、今なお耳の底にのこっている。私はその神の愛を信じ得ないで、遂に無信、邪見の惡衆生に、ただ念佛して、と喚びかけて下さる仏の慈悲一つに光を仰ぐようになつた。源信僧都は「極悪深重の衆生、他の方便さらになし、ひとへに弥陀を称してぞ、淨土にむまとべたまふ」とあり、道綽禪師は「縱令一生造惡の、衆生引接のためににて、称我名字と願じつゝ、若不生者とちかひたり」と、切々とお勧め下さつてゐる。称我名字とは、自分がどうする力もないことをかねて御見抜き下さつての大悲のみ声である。しかも仏教に八万四千の行があるが、若不生者不取正覺と、ただ念佛して淨土に生れないならば、自分は仏とはならないとの誓のついた大行はほかにないのである。この願力のたのもしさに安心させていただいて行くとき、我々が最も早く成仏させていただけ、大悲大悲心をもつて、おもつがまゝに有縁の人々を利益することが出来るのである。

この章で「いそぎ仏になりて」の一句が解り難かつたが、我々が早く成仏させて頂ける道が念佛成仏であるから、その法をいそいで聞信するようにとの恩召しである。一刻も否寸時もはやく親のもとに帰れかしと感じ続ける、迷い児

共に溺れるばかりであつた。弟は橋の袂の方に走つて、そこに舟を見出し、溺れる母と兄を救いあげた。何より大切なことは、自分が沈まぬ舟を見出すことであると教えられる。自分の持つて力を相手を助ける慈悲と、仏の御力によつて開かれる慈悲の消息を簡潔に述べられている。

○ 親鸞聖人は和讃に、

○ 小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふまじ
如來の願船いまさづば 苦海をいかでかわたるべき

○ さらに八十八歳の『自然法爾章』に
是非しらず邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり

○ と慚愧していられる。

これは私の岡山時代のことであるが、救世軍の山室軍平氏の話に「人間の親切はバケツの水で、すぐ空っぽになつてしまふ。涸れることのない神の愛につながれ」とある。又無教会主義者の内村鑑三氏の隨筆に「自分は色々な人の世話をしたが、どうしてもうだつがあがらない、敷居が高くなつたと遠ざかり、反対に立派に成功すると、昔の困窮していた頃を忘れたのか段々うとんじて行つた。唯

何時までも変わぬ交誼は共に道を求める聖書を読んだ人達だけを待つ母の切ないところである。愛執愛着の心にひかれて我々としては淨土へまいりたい心はおこらぬのであるが、この身を待ちに待つて下さる久遠のみ親の念力にひかれて往生成仏させていただけるのである。

（昭和六十年十月末日）

不聞語 清水 凡禿

さる日骨董屋さんと語る。その方は普通のそうした商売をしている方々と違つて、一見識を持つておられ、語られる一つ一つが非常に含蓄のあるお話でなかなか愉快であった。物の真偽の程がどうしても判別のつかぬ時は、まずその物を一生懸命毎日眺めていて、さて一たん箱か何かに入れて置き、何目か目に取り出して見て、なお倦きが来なかつたならばたいてい眞物である、と申された。やはり眞物には倦きがないらしい。

（昭和十六、八）

さる方が見えられて云われるには、昔両替屋の子僧を教育するには、偽金を見せることはせずに、唯眞物許りを見せて教育したものだと。なるほど何でもない様な話であるが、深いものを味わされた。私の様なもので常に如來の真実を聞かされているときに、偽物が出るたびに余りにもはつきりと、私の醜さが見えて来る。親鸞さまが「眞実を顕す」と一生懸命に叫んで下さった御心が少しでも味わせていただかれる。

（昭和十四、五）

あ
と
が
き

急に秋風と共に凌ぎよい頃となりました。燈火に親しんだ昔の人々も懐しい思出となりました。

本月は近角先生の「光明と名号」を父母になぞらえられた聖人の信味を頂きました。

福島先生の慈光のあとは、近角先生に導かれた若き日のありのまゝを述べて下さいました。信界建現誌から転載させていただきました。白井先生は倫理学、福島先生は教育

学と黄色黄光、白色白光を放つて下さいました。

聖徳太子は「如来に調伏せられて如来に帰依し、法の津沢を得て信楽の心を生ず」と申されました。内外の無数の縁に催されて信楽の扉の開けることを井上先生が誌して下さいました。

西元先生の日誌抄は、東奔西走の御忙しい中から、私共が軽く読みおとしがちの「願わくば此の功德を以て」の真味をお頬ち下さいました。

村上速水先生は、身をもって聖人の教をうけとめられることの大切さを、單なる理解を超えて味うようお勧め下さいました。ことに障り多きに徳多しの念佛道の妙味を大病によりいよ／＼深められました、ありがたいことです。

岩崎成章師によつて、木村無相師の法信を頂き、次々と記載させていただきます。心して御味読願います。生死をこえた法の光耀を今更に驚喜させられます。

私の歎異抄に導かれては、人生のあらゆる面にわたつて聖人が身をもつて信味下さるお蔭で、事にあい、縁にふれて、わが身にしみていただけて、その一端を誌しましたが、仰げばいよ／＼高い広大な信海は、これから／＼とおぼつかない身ながら、攝取不捨の御手にひかれてまいります。よろしく御叱声をお願い申上げます。

御案内

十一月十七日に例会を開きます。お忙しい中を御来会お待ちいたします。

定価	半年	八〇〇円(送共)	愛知県西加茂郡三好町大字裕谷
編集・発行人	花田正夫	印刷人	天野昭夫
電話	八二二局七〇三七番	名古屋市南区駒上二丁目古屋一丸	名古屋市南区駒上二丁目古屋一丸
発行所	慈光社	振替口座	名古屋一四二四七番
郵便番号	四五七	郵便番号	名古屋一四二四七番